

## ひきこもり支援の哲学と方法をめぐって —若者問題に関する韓日間比較調査から— 第1報

山本 耕平\*, Insoo Lee \*\*, 安藤 佳珠子\*\*\*

本稿は、2007年度より3年間、立命館大学産業社会学部産業社会学会の研究補助を受け実施したひきこもり韓日比較研究結果の第1報である。調査テーマは、「社会的ひきこもり形成要因の韓日比較研究—1970年以降の社会変動とひきこもりの形成—」であった。本調査では、2007年度に韓国の青少年研究者に韓国青少年問題と政策に関するインタビューを実施した。2008年度には、韓国の青少年支援施設とホームレス支援施設の実践調査を行った。さらに、2009年度には韓国の若者や支援者を対象としたインタビュー調査を行った。結果、韓国では隠遁型ウェトリと称されるひきこもりが増加しつつあり、その背景に大学受験競争の激化やインターネット依存があり、そのなかでバーチャルな対人関係が生じていることが推察できた。しかし、韓国の若者達は、その状況を深刻な課題と受け止めつつも、当然耐えなければならない思いを持っていた。その一方で、IMF危機以降若者達が、学校や企業への適応が自身の生き方と合わないと考えオルタナティブな就労や学びの場を創造しつつある。ここでは、自尊心を向上させる為に人文学の学習をプログラム化している。

キーワード：ひきこもり、韓日比較研究、支援哲学、ひきこもり要因

### はじめに—韓日に共通する課題—

2005年11月、「2005 International Symposium」(은둔형 외톨이 등사회부적응 청소년 지원방안)がソウルにて開催された。これは、韓国社会に十分な参加ができずに放浪する若者が増加し、適切な社会的支援が緊急に必要であるとの危機感を持つ韓国青少年院が主催した。

韓国では、1991年12月に青少年育成の基本法

が制定され、2005年に改正法が施行されている。同法の目的は、「青少年の権利及び責任と家庭、社会、国家及び地方自治団体に青少年に対する責任を定め、青少年育成政策に関する基本的な事項を規定すること」にある。同法に基づく青少年福祉支援法(2005年)では、法の対象である「特別支援青少年」を「青少年の均衡ある成長と、生活に必要な基礎的な与件が備わっておらず、社会的、経済的に支援が必要な青少年」とし、「国民基礎生活保障法など、他の法律の適用を受けている青少年は除外する」と規定している。

2005 International Symposiumにおいて、ファン・スングル氏らは、韓国の若者達には、家

\* 立命館大学産業社会学部教授

\*\* 祥明大学大学院家族相談・治療学科教授

\*\*\* 立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

出、自殺、学業中断、インターネット中毒、薬物乱用、性問題、学校暴力などが増加し、彼らの健康と地位が多様に脅かされていると報告している。さらに、若者達の危機状況に適切に介入しない場合、否定的な結果に至る危険性が高く、危機青少年（法的には特別支援青少年）のための社会安全網を構築する事業を核心課題に設定して諸般のシステム構築が必要であることを強調した（황순길·권해수·장미경, 한국의, 2005）。

なかでも、ひきこもりが韓日両国共通の若者の課題となり、その課題は、家族から相談がない限り可視化しづらいものであり、なんらかの介入（支援）がない限り、いつまでも当事者と家族が孤立する可能性が高いという認識を、両国が共通してもつことが明らかとなった。

### 1. 韓日ひきこもり比較研究の目的と背景

2005 International Symposium では、我が国でひきこもりと言われる若者を、韓国では隠遁型ウェトリと言ひ、我が国とは若干異なった診断クライテリアを提示している<sup>1)</sup>。

2007年度から「社会的ひきこもり形成要因の日韓比較研究—1970年以降の社会変動とひきこもりの形成—」をテーマに調査を進めてきた。しかし、韓国調査を行う際には、この調査対象を、いわゆる危機青少年とし、あえて社会的ひきこもりに限定していない。それは、ひきこもりに対するクライテリアの違いに依拠する。クライテリアの違いは、時に、調査対象の混乱を生じさせることがある。我が国の社会的ひきこもりが、韓国では、インターネットアディクションや、ひきこもらずに家出あるいは若年ホームレス化としていった若者（青年期）の発達危

機状況として生じていることが予想された。

筆者は、若者のひきこもりを「青年期に生じる同一性獲得不全に伴う発達危機の一形態であり、その危機は、人生を規定する経済や文化・価値等の社会的背景、思春期以降の青年の発達や生活を規定する社会システム（学校・家族・地域）の変容との関わりで生じる。社会との交流を絶ち、一定期間の自宅・自室へのひきこもりであるが、統合失調を伴わないもの」（山本, 2009）と定義してきた。

これは、三つの理論的背景を根拠に定義したものである。まず、一つ目の理論的背景について述べる。ひきこもる若者達の多くが他者との「かかわりあい」に困難をもち、それが要因となり社会で自己の位置を明確に確立することができないと考える。この「かかわりあい」の力は、青年期の同一性獲得を考える上で重要な要素である。その理論的根拠となるのはエリクソン（1973）であろう。エリクソンは、「かかわりあい」、親密さを育てる自己の育ちにつき次のように述べる。少し長くなるが、筆者がひきこもりを論じる上で重要な位置を占める為引用する。

他人たちとの本ものの「かかわりあい」を結ぶことは、確乎たる自己確立 self-delineation の結果であると同時に、自己確立の試練でもある。この自己確立が未だの場合、この青年は、特殊な緊張を経験しがちである。つまり、その緊張というのは、その青年が、友情、競争、性的な遊びや愛情、議論やうわさ話などを通しての、暫定的な形での遊戯的な親密さ tentative forms of playful intimacy を求める時に、まるでこのような暫定的なかかわりあい tentative engagement が、同一性の喪失をひきおこしそうな対人的融合 interpersonal fusion

になってしまうのではないかという緊張であり、そのために、かかわりあうことに気を使ったり、内的な緊張のために、それを控えざるをえなくなってしまう緊張である (E. H. エリクソン, 1973: 164)

エリクソンが捉えてきた精神病理現象としての「アイデンティティ拡散症候群」は、時代の変遷とともに、現代、「正常な」若者に共通し生じやすい社会心理現象として考えられるようになってきている<sup>2)</sup>。自分がどう生きるかを確立し社会にコミットメントすることが必要となる青年期において、他者とかかわり価値観や人生観を築き、その期の諸課題と対峙することが困難な状況が若者達に普遍化しているのである。その具体的な現れの一つがひきこもりではなからうか。

二つ目の理論的背景は、ICFの生活機能障害<sup>3)</sup>に基づくものである。筆者は、ひきこもりを「社会的ひきこもり」として捉えることに肯定的側面と否定的側面があると考え。肯定的側面には、若者のひきこもりが、統合失調症の自閉やうつ病の精神運動制止としてのみ捉えられない状況であることを「社会的」という概念を用いることにより精神病理要因と社会的諸要因の関連を明確にした点がある。さらに、社会参加困難が、個人や家族の病理要因のみでなく社会的諸要因も背景となり生じていることを示唆したことも肯定的側面として指摘できる。一方、否定的側面としては、ひきこもりの背景となる多くの精神疾患の諸症状を軽視することに繋がりがねない。なかでも、社会不安障害、いくつかの人格障害や神経症圏の疾患、さらには発達障害等の精神発達上の課題が背景となり、ひきこもりを形成している事例がある。基礎的

な疾患や障害を持つ者の精神機能が、その発達過程で環境因子により強化され、ひきこもりとして現象化していると考えられるのである。ここから、ICFの生活機能障害からひきこもりを考えることが重要であると考え。

三つ目の理論的背景は、斎藤環の「ひきこもりシステム論」(斎藤環, 2003)への反論として提起するものである<sup>4)</sup>。「社会との交流を絶ち、一定期間の自宅・自室へのひきこもり」は、確かに、斎藤が述べるようにディス・コミュニケーション (dis-communication) として理解することができよう。しかし、ひきこもる行為とディス・コミュニケーションのかかわりに関しては、若者達がひきこもる意味に耳を傾ける必要がある。斎藤は、個人・家族・社会それぞれの境界で誤解と葛藤、罵倒と断絶のみが生み出され続け、それぞれのシステムに悪循環が生じるとディス・コミュニケーション再生産システムについて指摘するが、この斎藤の論は、「社会との交流を絶ち、一定期間の自宅・自室へのひきこもり」のなかで、若者達の内面に育ちつつある力強さを見のがすことになりかねない。筆者は、彼らがひきこもる意味のなかに、その状況と向き合う力強さを発見する作業が、精神保健福祉実践研究としてのひきこもり研究に課せられた課題ではないか考える。

## 2. 韓国の若者支援政策の動向と哲学

我が国の若者支援政策の根底を流れる哲学に関して、岡本祐二が、若者を問題化する二つの「まなざし」の交錯を指摘する。岡本が指摘する二つの「まなざし」とは、フリーターを「職業能力が不足している状態」とみなす「まなざし」と、ニートを「仕事への能動性・主体性が

不足している状態」とみなすものである。岡本は、そこに、フリーターやニートを問題化する「まなざし」が交錯し、「前者は『能力』の欠如を、また後者は『意欲』の欠如を問題化するという違いがあるものの、両者とも若者自身に問題解決の努力と責任を求めているという点では同じである」（岡本祐二，2008，傍点：筆者）と若者の自己責任論が根底を流れることを指摘する。この岡本の指摘は、支援哲学を分析する際に重要な視点である。若者自己責任論は、彼らが生きる上でなんらかの困難さを持ってきた社会を容認し、適応困難となった若者に責任を求めることにより成立するものである。そこでは、若者が自己の能力や技術の至らなさを認め、今ある社会への適応を目指す支援が展開される。

## 2-1 韓国での若者インタビューから学ぶ若者生活

2005 International Symposium では、一般高等学校の学生を“社会回避型不適応青少年”“危険群”“潜在群”の三つに分け検討を加えている。そのなかで、社会的回避の契機や動機を知るために、登校や外出しなく自室のみで暮らそうとした理由に関する質問がある。その回答をみると、過労により社会回避となっている者が、潜在群に50.5%、危険群に34.4%みられる。また、一人で過ごすのが楽だからという要因が潜在群で38.1%、危険群で46.9%みられる。さらに、「学校生活が負担で無価値に感じて」「学業能力や成績に対する劣等感で」など学校生活への不適応が重要な社会回避の理由として指摘されている<sup>5)</sup>。

## 2-1-1 韓国の受験社会の様相

韓国の高等教育機関（大学、教育大学、産業大学、専門大学等）とその学生は、図1のように増加傾向をみる。進学者は、1981年以降急増し、1985年に1,277,825人、1990年に1,490,809人、2000年に3,363,549人、2005年に3,548,728人と推移している。金泰勲（2008）は、進学率では1975年に25.8%であったものが、2005年には82.7%に増加し、「教育格差」や「社会・経済的に恵まれていない者」に配慮した入試改革がこの進学率の向上の一因であると指摘する。この進学率は、その後、2008年には98.09%となっている（図2：UNESCO Institute, 最新更新日2010年12月16日）。

1974年、入試第一主義の中学校教育への不信任感、学校間格差の拡大などの解決をめざし、当時の朴正熙大統領が、ソウルとプサンで高校入試を廃止したことが韓国における高等教育機関への進学欲の高まりの背景にある。これは、高校平準化制度と言われるものであるが、この制度は、多くの問題を生み出した。この制度の下では、実力でなく抽選により進学高校が選抜された。それは、学生と保護者の学校選択権の制限でもあった。1995年の金泳三大統領により発表された教育改革（「新教育体制樹立の為の教育改革案」）が、1998年当時の金大中政権下においても受け継がれ、それが基となり、2002年からの大学入試は、「総合学生生活記録簿」と「大学修学能力試験」、大学独自の試験、推薦書等が判断基準となっている。総合学生生活記録簿は、高校時代の知（教科成績）、体（体力）、徳（品性、奉仕活動、協力性）の領域の成績が記録されたものである。金愛花が指摘するように、韓国の大学入学者制度には政治的影響が強く、大統領選の公約となった大学入学制度改革

が、行政側により展開されてきたと言えよう(金愛花, 2008)。

1981年から1996年までは大学入試の管理主体は政府にあった。1994年の大学入試選抜改革では内申書が40%以上加味され修学能力試験と大学別考査が実施されるようになった。以後、高校時代の内申と「大学修学能力試験」の成績をあげることが序列の高い大学に合格することにつながる事となった。1980年から禁止されていた塾通いに2000年4月に違憲判決が出たことから、韓国の受験戦争は激化した。

我が国の内閣府が、18歳～24歳までの青少年を調査対象とした「第8回世界青年意識調査」がある<sup>6)</sup>。ここで、学校に通うことの意義を調査した項目がある。その注目すべき結果に「友達との友情をはぐくむ」(韓国41.2%, 日本65.7%)と、「自由な時間を楽しむ」(韓国14.7%, 日本32.5%), 「先生の人柄や生き方から学ぶ」(韓国16.1%, 日本27.2%)というものがある。ここに反映しているのは、調査対象である18-24歳の若者、いわば大学生がそれまでの「学校」生活で獲得してきた思いであろう。筆者がおこなった韓国の若者達へのインタビューにおいて、一人の若者が「自分達は、大学に合格するまでは機械です。大学に合格してから人間です」と述べた。韓国の若者達にとって、学校が、友達との関係を育んだり、先生の人柄から学ぶより、学歴や資格を取り、専門的な資格を身につけるために存在するものとなっていることは否定できないのではなかろうか。

趙恵貞(1999)が、「現在韓国の学校文化は『冷戦文化』であると言えるだろう。教師と学校は敵対関係にありながら、それを表示しない『冷戦状態』にある。7、8年前に日本では校内暴力が起こっており、私はその状況を見て、

韓国はそれよりも良いのではないかと考えていた。しかし、日本は暴力化の時代を通して青少年が一つの空間を獲得していったのに対して、韓国の場合はその過程を経ないままに冷戦状態に突入してしまった」と述べている。内閣府の調査は、この趙の指摘と符合するのではなかろうか。

韓国において学校内暴力や対教師暴力が生じず、なぜ、日本の学校で、若者達があれほど荒れたのであろうか。この疑問に対して、趙は、日本の高校生と出会い、持った思いを「頭を染めたり化粧をしたりしている学生が多かったこと。高校生が自己表現のスペースをもっている。日本の高校生がどのようにしてその自由を獲得していったのか興味がある」と述べ、仮説として「日本では非常に学校が暴力化していった過程を経験しているので、規則で子どもを押し込んでいくことの問題に気づいた。それによって、今の子ども達は多少なりとも権利を獲得していったのではないか」(趙恵貞, 1998)との考えを示している。

筆者は、我が国のひきこもりは、高度経済成長による社会構造の変化がもたらした青年期の発達上の危機であり、1970年以降の若者の生活の変化を捉える必要を指摘した(山本耕平, 2005: 29-30)。1980年代に青年期を送った世代は、自己の身を守る価値観である「会社主義」や「学歴主義」への没頭がより濃厚となった時を生きてきた。彼らは、競争が自己目的化し、学校が、居場所や生活共同体ではなく、競争といじめの場所として二極分化するなかでいた。今、彼らは、既に壮年期になろうとしているが、我が国は、まだこの会社主義や学歴主義から脱した状況にあるとは言えない。さらに、我が国の1990年代以降の若者達の生きづらさであ

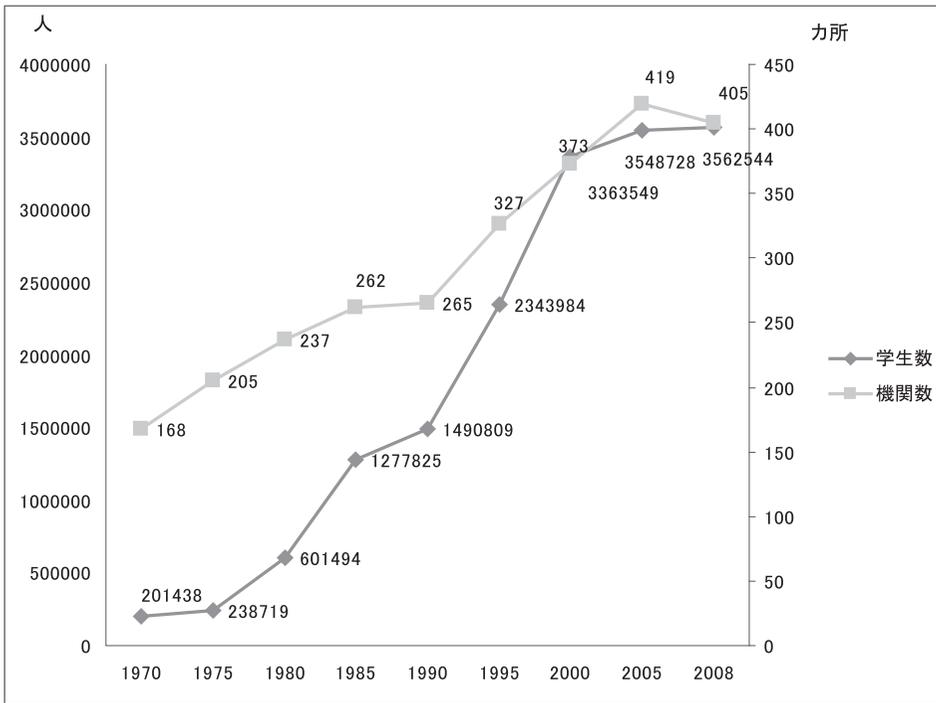


図1 韓国における高等教育機関数・学生数の推移

Ministry of Education, Science and Technology (MEST) and Korean Educational Development Institute, 2008

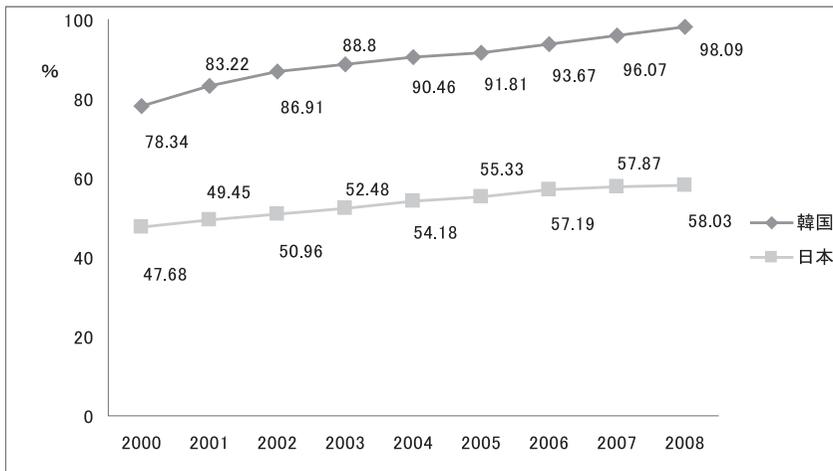


図2 韓日大学進学率

UNESCO Institute for Statistics（最新更新日：2010/12/16）

る社会への主体的参加の困難さと、韓国の若者達が今おかれている状況に共通性を持つ。韓国の若者の言葉を聞く時、その背景となるのが、

多様な生き方の閉ざしにあるのではないかと考える。

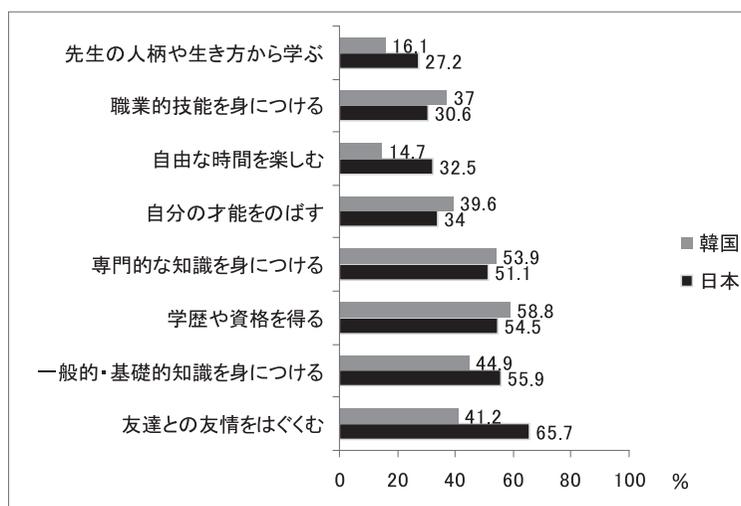


図3 学校に通うことの意義

（内閣府「第8回世界青年意識調査」の結果より作成：2009年3月）

### 2-1-2 韓国の若者は大学受験とひきこもりをどう捉えているのか—2000年4月以後に大学を受験した若者へのインタビューを通して—

2009年1月、ソウルにて現役大学生と大学卒業生を対象としたグループ・インタビューを実施した。そこで明らかにしたかったことは、若者の生活になんらかの影響を及ぼし、若者問題が生じている背景に韓国の大学進学率の激増や大学序列化に伴う受験社会への過適応（我が国で「受験戦争」と称された状況）が存在することである。

インタビューに応じたのは、次の者達である。

A（女性，84年生まれ）

小学生の時に塾に通ったが、それほど本格的に塾に通った経験がない。

B（男性，81年生まれ）

小学校の頃から、ピアノや学習塾に通った。中学入試塾にも通った。また、中学3年までは19時まで学校があり、その後、学習塾があ

った。高校3年生時には、午前7時30分～22時まで学校があった。その内、昼食が12：00～1時間30分あり、夕食が17：00から1時間あった。18：00から22時までは自習時間であり、22時～1時までには塾だった。彼は、「家族との食事は週末のみだった。」と話した。

C（女性，83年生まれ）

幼稚園から母親に習い事をさせられた。中学では高校入試予備校に通い、21時まで学校で自習があった。21時以後は塾の時間だった。高校では、予備校が早いと21時に終わったが、遅いと23時までであった。妹は、今、大学入試だが、0時まで学校がある。

D（男性，82年生まれ）

高校入学は自身が願う高校でなかった。大学に行くつもりではなかったが、高校3年で日本語に興味持ち大学に進学した。夜9時まで高校で勉強したが、時々サボることがあった。

しかし、時々サボることに不安感はあまりなかった。

E（男性，85年生まれ）

Eは，母子世帯であったため，小学校や中学校では塾や予備校に行かなかった。高校のときは，インターネットで授業の講義を受ける。

（調査実施日，2009年1月8日）

この5名に共通していることは，1980年代中頃までの生まれであり，IMFショック時に，中・高校生であった者である。つまり，大学受験が激化してきた時期に高校時代を過ごしてきた者達である。また，5名とも大学で日本語を学んでいる。兵役を済ました者は1名であった。

この若者たちのなかには，あえて学校での補習授業に参加することを拒否したDと，経済的に補習授業や塾に参加できなかったEがいた。この2名を除いて，自己が受験競争への過適応であったという認識を持っていなかった。

彼らにひきこもりに関する印象を尋ねた。そこでは，「多くなってきている。テレビで見たことがある」「表面化していない，自分の周りでは見つけることが出来ない，受験に失敗して自殺はある」「たまにテレビで見たことがある」「友達の中ではいない，友達に聞いたことも無い，学校へ出席しない友達はいた。しかし，社会生活はできていた」といったものであった。

さらに，過酷な受験戦争に過剰適応するなかで不登校やひきこもりが生じているのではないかと尋ねると，受験への過剰適応や挫折に伴う問題は，ひきこもりではなく「自殺」であるという言葉として返ってきた。

韓国高校生の平均的な生活時間が大学に合格することを目指したものであるが，それは，当り前のことであり苦痛でないとの語りがあ

た。Bから得た情報を整理すると次の生活時間となる。

学校	0時	限目	7：30	開始
			↓	午前の授業
	12：30	～	13：30	食事（学校で）
			↓	午後の授業
	16：30	～	17：00	食事（学校で）
			↓	自習（自学習）
	22：00			終了
			↓	塾もしくは家庭教師
	01：00			帰宅

彼らが，この生活時間を「当り前のこと」「苦痛でない」と語る背景には，Bが語った次の思いがある。それは，「韓国では，大卒以上の高学歴者が教養のある人であり，生活も裕福だ。高学歴者と低学歴者の中で生活の差が大きいなかでは，私は，大学受験中は機械であり，大学入学後は人間になると考えていた。」というものである。また，Cは，「勉強するのは嫌だったが両親に強制されていた。学生だから勉強するのはあたりまえだという強制のなかで当り前に勉強してきた」と語った。

若者達は，韓国における入試制度は，「大きな問題である」と感じつつも，現状では，この入試に適応しなければ，韓国社会で生きることができないとの思いを強く持っている。若者たちに，「競争についていけない，学生たちは以後どのようになるのか」との質問を向けたところ，「彼らのことに，特に関心がない。自分のやりたいことをやればよい」との回答があった。

大学への受験戦争，さらに，過酷な国家公務員試験にパスし大韓民国行政安全部（Ministry

of Public Administration and Security) で勤務する H 氏に質問を行った。彼は、国家公務員試験受験にあたって夜と昼が逆転する生活は当然であるし、考試院 (コシウオン) で閉じこもり、勉強する生活が必要となるのは当然であると答え、大学受験時に学校に過適応するのは理解できるとの考えを示した。また、彼は、いわゆる隠遁型ウェットリを、肯定的な意味で捉えているとさえ言いきった。彼は、韓国社会のなかでは、何かの目的を持って (一人でがんばって) ひきこもる人達の多くが、隠遁型ウェットリと同様の生活を送っているとの考えを示した。

## 2-2 若者の生きづらさと家族・学校にみる「暴力」

2009年9月の調査において、韓国の若者支援に関わる支援者にインタビューを行った。そのインタビューの目的の一つに、いわゆる危機青少年といわれる若者と「暴力」被害との関連を明らかにすることがあった。

ここで聴取したある支援者の言葉から、韓日の若者たちがおかれている状況の共通性を捉えることができるのではないかと考える。彼女は、社会福祉士として2年半危機青少年シェルター (青少年センター) に勤務する女性ワーカー (20代後半) であった。

彼女は、青少年シェルター (青少年センター) で保護される若者達について以下のように述べる。

青少年センターには、いじめをした学生も、いじめられた学生もいる。先生からだめだと言われたことに耐えられず、家出をする人もいる。危機スクリーニングをみると、暴力によって他の地域に転学した子や、強制的に性売買をさせられ子もい

る。韓国のチャットにボディボディというところがあり、強制的に性売買させることがいじめのひとつとなっている。また、ホームレスではないが、それに近い状態の人はいらる。親から虐待を受けて、シェルターに来る場合がある。父、一人のため、ケア力がなく、施設にくる場合がある。また、離婚して再婚し、その継父母との折り合いが悪く、両親がいないケースもあった。中学までは義務教育であるが、給食費などが払えず、不適応になる場合が多い。親が日雇いやケアワーカーである時、会社で保険に入ることができていないため、保険のない子どももいる。シェルターに入ると、すぐに病院に連れていく。医療費は健康保険に入っていない子どもは、シェルターの補助金から払う。1年に1人くらいは、入所時に妊娠している人がいる。

(調査実施日2009年9月8日)

さらに、貧困家庭の親の低学力、経済的な余裕のなさや、ケア力の弱い家族や精神障害もつ親が虐待要因となっていることも指摘する。ここにみる若者の姿は、まさにセーフティネットの貧弱さとの関わりで論じなければならない課題である。我が国においても、セーフティネットの貧弱さゆえに危機状態にある若者の姿は、数々報告されている (湯浅 2009)<sup>7)</sup>。

社会的諸要因により家族が子どもを育てる力を弱めてきた事実とともに、本調査において、さらに明確にしたかったのは、我が国で1980年代に顕著に生じた対教師暴力が韓国で生じてきたのかという問いであった。これに対して、先のグループ・インタビューでも明らかになった。

◎日本では、1980年代半ばから校内暴力や学級崩

壊という問題が深刻化している。韓国ではどうか？

D: まず、韓国では、学校は行くべきであり、欠席すべきではないと考える人が多いのではないか。1日でも休むと人生に関わってくるという思いが強いのです。

◎学校でいじめや暴力はないのですか？

B: いじめはある。先生が生徒を殴る事もある。でも、生徒が先生を殴ったり学級崩壊などは考えられない。

◎先生に対する尊敬が大きいのか？

B: 大きいかどうかは解らないが、強いと思う。

(◎: 山本, 調査実施日, 2009年1月8日)

この若者達の言葉から、何を学ぶべきだろうか。教師に対する尊敬の大きさを聞いた時、Bが「大きいかどうかはわからないが、強いと思う」と答えた。このBの捉え方に趙が指摘する「冷戦文化」が創り出す学生と教員間の「冷戦状態」を読み取ることができるのではなかろうか。趙は、平準化によって、レベルの違う生徒が一つのクラスで学ぶことになった高校では、出来る子は授業では全く別のことをやり、出来ない子は全く授業が理解できていない状況があり、出来る子も出来ない子も疎外されている状況にあることを指摘している(趙恵貞, 1999)。その姿は、個々の学級への主体的参加を阻害するものであり、本来ならば、学級が荒れる要因になっても不思議でない。先に示した高校生の0時限目の授業や、夜間の自立学習は、平準化という全体主義政策の下で生じた束縛であろう。彼らに、不登校や学校内暴力が生じないのは、主選考基準としての大学修学能力試験と学校生活記録簿(いわゆる内申書)を重視する大学入試選考方法をくぐりぬける必要があるから

ではなかろうか。

彼らの言葉に、教員による強い支配と、それに従う学生・生徒の姿をみる。彼らは、学校を、「行くべきであり、欠席すべきではない」ところであると捉え、「1日でも休むと人生に関わってくる」という強い思いを持つが故に従順に従わざるをえないのである。学校を怠けることや、教師に対する主張は、自己のありようを巡って若者達に生じる行動である。しかし、その行動を抑制せざるを得ない状況が彼らにあるのではなかろうか。

IMF危機以降、こうした抑制からの自由を目指し、学校への適応や新自由主義的社会への適応を批判し、オルタナティブな学校(代案学校)の取り組みや社会的企業が生み出されている。

### 3. 韓国の若者とひきこもり文化

#### —インターネット・アディクションへの着眼—

2005国際シンポジウムにおいて、ファン・シングルらは、隠遁型ウェットリ(ひきこもり)状態にある若者達は、サーバー空間を通して社会とのコミュニケーションを図っていると指摘する(황순길, 권혜수, 장미경, 한국의, 2005)。一方、先述した「第8回世界青年意識調査」のインターネット利用に関する項目をみると、パソコンでのインターネットを利用している18-24歳の青少年は、韓国で98.6%, 日本で77.6%となっている。また、インターネットトラブルは、「迷惑メールが頻繁に送られてきたことがある(韓国64.1%, 日本44.2%)」「18歳未満の子どもにとっての有害な性・残虐性・自殺誘発・犯罪誘発サイトをみたことがある(韓国43.4%, 日本16.5%)」「年齢を偽ってアクセス

したことがある (韓国19.7%, 日本5.2%)」と、いずれも韓国の方が多い結果となっている。

ひきこもる若者がインターネットに依存する傾向は否定できない。また、依存が不幸な事件の契機となる事実もある。2010年4月17日、愛知県で、父親にインターネットを解約された若者が激怒し、父ら5人の家族を死傷した事件が起こった。この事件は、公判中であり、その若者の背景については十分報道されていない。しかし、中学校1年生の時にいじめられ、その数年後からひきこもりとなり15年が経過していることや、インターネットを活用しインターネット・ゲームやショッピングを行っていた事実は報道されている。この事件は、悲惨な結果を招いた。ただ、インターネットが、ひきこもる若者達にとって社会との関係を遮断しきらない重要な役割を果たしているのも事実である。さらに、我が国のインターネット・カフェは、自宅や自室以外にひきこもっていた若者達が、社会に参加する前に社会との関わりへの挑戦を行う場としての役割を果たしている事実もある。

韓国では、インターネット・アディクションが深刻な状況を呈しており、それとひきこもりの関係が指摘されている。허요연 (2005) が、社会的回避現状を表す不適応青少年<sup>8)</sup>を“隠遁型ウェットリ”と、“NEET, 学業中断, インターネット中毒青少年中社会的回避現状を表す青少年”に分け、インターネット依存を、「インターネット使用において耐性と禁断症状を現わして、これにより社会的あるいは職業的その外の重要な部分で苦痛や障害を誘発する状態」と定義する。そこで、インターネット依存により、若者の生活の何が問題となっているのかを検討しなければならない。

そもそもインターネット・アディクション

は、単独で障害とみなすことには、いくつかの見解がある<sup>9)</sup>。ただ、インターネット・アディクションによる日常生活への参加障害や浪費等は、日本においても臨牀的に数限りない報告をみる。ひきこもりが、まだ深刻でないと把握する韓国の臨牀家達も、インターネット・アディクションは、若者達の日常生活を狭め、対人関係に支障をもたらす要因となる深刻な問題であると考えている。この状況は、インターネット・アディクションによる「社会的あるいは職業的その外の重要な部分で苦痛や障害」として捉えるべきものであり、具体的には寝不足で朝起きられない、学校や仕事に行けない、実際の対人コミュニケーションの巧緻さに欠ける等として生じる青年期の発達課題に取り組む力の障害として生じる。

### 3-1 PCバンは、若者ひきこもりの文化要因と考えられるか

そこで、韓国における若者とインターネットとの関わりについて調査をおこなった。調査内容の第一は、我が国では、寝泊まり可能であり、一人の生活を創出できる条件もあるインターネット・カフェであるが、韓国におけるPCバンが、若者達にどのように認識され利用されているのかである。

韓国におけるPCバンを利用する若者に対するインタビューを行うことで、PCバンとインターネット・カフェの機能的な共通点と相違点を探る方法をとった。調査は、2009年1月4日に、ミョンドン(PCバン)を利用する若者にインタビューを実施する方法で行った。このインタビューは、20代・30代の若者を対象として実施し、通訳を伴い、喫茶店でのインタビューを依頼するという方法をとった。

その調査項目は、以下の通りである。

- ・ PCバンで寝泊まりできるか
- ・ PCバンを一人の空間として利用できるか
- ・ PCバンを利用している人に、ひきこもり（いわゆる隠遁型ウェットリ）のがいるか
- ・ PCバンをあなたはどのような目的で利用しているか

この調査で、PCバンを利用中の若者にインタビューを依頼し、4名から聞き取りをおこなった。この4名の内2名は大学生であった（1名は、アメリカの大学に留学中。1名はソウル市内の有名私大在学）。アメリカに留学中の学生は、2008年9月に進学した新生だった。もう1名も、大学1回生であった。後の2名は、有職青年であった。

彼らは、インタビューのなかで、PCバンに寝泊まりの機能はないと共通して答えた。彼らは、PCバンは、閉鎖された空間でもないし、寝泊まりもできないとし、安い金額で寝泊まりできるならばチョッパンであり、閉鎖された空間であれば考試院（コシウォン）であると回答した。

チョッパン（単身生活者用宿所）は、IMF危機以降、急増したホームレス（露宿者）を通しその存在が明らかになった。第二次大戦後、韓国政府は国力を回復させるため工業政策に力を注ぎ、その結果、衰退した農村社会から人々が都市に流入し、急激な人口増加が起こった。ソウルの人口集中は著しく、極度の住宅・宅地不足に陥った。その時、生じたのがチョッパンである。経済発展のための重要な労働力だった低所得者層は、劣悪な居住環境であるところに自力で宅地を開発し住まいを設けた、考試院（コ

シウォン）は、韓国の公務員試験（とりわけ、国家公務員試験）を受験する者が活用する個室である。もちろん、そこには、PCは常置されていない。3畳から4畳くらいの大きさの部屋にベッドと机、シャワーが設置されている。ここは、閉鎖された空間であり、公務員試験を受験する者にとっては、外の雑音から自己を切り離すことができる。

我が国で、インターネット・カフェを自身の宿所代わりに利用する状況が生じていることが厚生労働省の調査で明らかとなり<sup>10)</sup>、インターネット・カフェ難民としてその深刻さが議論され始めたのは2007年以降である。

訪問したソウル市ミョンドン界隈のPCバンは、一人の世界を創出し、寝泊まりできる我が国のインターネット・カフェと異なり、図書館の情報検索ブースを想像するものであった。ここでは、メールを検索している者や、インターネットを活用した戦争ゲームを何台かで行っている者がいた。その場は決して閉鎖的な環境ではなかった。インタビューに応じた彼らも、その日は、メールの確認や、宿題の為の情報の検索を行いつつ、インターネット・ゲームも楽しんでいた。

PC普及や、インターネットへのはまりこみのみがひきこもり要因とは考えられない。ただ、ひきこもる若者の多くは、1970年代以降に生まれた者である。彼らが、育つ過程でPCは、彼らの一人生活を支える役割を果たした。調査した限りの韓国のPCバンは、一人きりになれる場ではなかった。ただし、これには、訪問調査の限界がある。筆者が訪問調査した地域以外のPCバンがどのような機能を持つかは今後の調査課題とする。

### 3-2 PC アディクション, インターネット・アディクションとバーチャルな対人関係

PCの普及やインターネット・アディクションとひきこもりとの関係は、PCが、同年齢の他者との生活に参加することを阻害している根拠が必要となる。そこで第二の調査内容をインターネット依存により若者の生活の何が問題となっているのかを検討することに求めた。

韓日、両国に共通することとして、高等学校以上の高等教育と競争主義激化との関わりが、若者達を地域で同年齢の仲間との関係を創り上げることから遠ざけ、インターネット普及が彼らの一人での生活を支えてきた事実がある。

韓国では、彼らのことをN世代と呼ぶ。朴吉聲(2003)は、N世代を、デジタル媒体に取り囲まれて成長した最初の世代であり、デジタルカメラ、ビデオゲーム、CD-R等の新媒体をインターネットと連携させて活用し、サイバー世界をあたかも当たり前にある存在として受け止める世代として表す。彼は、この世代と韓国社会との関わりに関して次のように述べる。

N世代は韓国社会がわりあい経済的に豊饒を謳歌した時代に成長した世代である。韓国社会の消費パターンが必需的消費から文化的消費に入った時代に成長した最初の世代である。そして彼らは韓国社会が政治的民主化、社会的開放を通じて多元主義的価値を少しずつ内面化する時期に成長した。N世代に関する論議はおもに、インターネットを通じたネットワーク的意思疎通を可能にするデジタル媒体の拡散とその影響との関係を中心に進められてきた。N世代形成自体が情報化の産物であると言えるからである。しかし、西欧のN世代形成がおもに新しい情報環境の拡散ともなう社会変動の産物であるとすれば、韓国のN世代は

このような情報環境の変化とあいまった社会の歴史的变化とともに形成されたものであることを注視する必要がある(朴吉聲, 2003:102-103)。

PCアディクション, インターネット・アディクションを考える上で、朴が指摘する情報環境の変化と社会の歴史的变化につき、両国は、共通して捉えなければならない。たとえば、宮本みち子は、1980年代にマンガやゲームソフトやコンビニが深く浸透しコミュニケーション能力の低下や孤立化現象が広がり始め、この時期の子ども達が、学校教育の時期を過ぎ若者となった頃、「他人に頼るすべや人とつながるすべが身に付かなかった青少年が実社会へ出ても社会関係を作れず、自分の居場所を見つけることができない状態に陥っている」ことを指摘している(宮本みち子, 2008)。これは、まさに情報環境が変化し、PCにより提供される擬似的対人関係のなかで自己の世界を語ることが提供され、同年齢の仲間との関係から遠ざかっても強い孤独感を持たずに時間を過ごすことが可能となっていると考えられるのではなかろうか。筆者は、「漠然とした不安のなかで、若者たちは他者とかかわり、結合することへの不安をもち、仲間を得る力を失い、同年齢集団への参加が制約され、次第に社会的に孤立する」(山本耕平, 2009:18)ことを指摘した。そこで得られるのは、あくまでもバーチャルな対人関係であり、自己がなんらかの課題と向き合った時に、力を出し合うことが可能となる対人関係の獲得ではない。

韓日の若者の深刻な課題に自殺がある。この対人関係の獲得の困難さと自殺との関係は、今後の比較研究の対象とする必要がある。

#### 4. 韓国における若者支援哲学と方法

韓国政府は、2012年までに、危険度が中程度以上の危機青少年のうち半分の32万人を対象に集中的に相談や心理治療を行い、その活動予算の充実や支援の強化を推進する計画である。また、危機青少年を支援する「学生生活支援団」「長期教育センター」における支援も展開する予定である。

##### 4-1 若者支援哲学と人文学

韓国の若者支援の場で人文学学習を重視する実践と出会うことが多い、この人文学学習は、ホームレス支援の場でも自尊感の向上を目指して取り組まれている。そこで、この調査では、ホームレス支援と若者支援で人文学を重視する背景を探ることとした。

2009年1月の調査時には、1999年からホームレス（露宿者）の自立と社会復帰を対象としたホームレス支援を行う大韓聖公会の「タシソギセンター」と「ヴィジョン・トレーニングセンター」を調査した。それは、韓国の若者の大きな課題に家出があり、家に帰ることができない彼らがホームレス化する可能性があると考えた為である。

タシソギ・センターのソーシャルワーカーは、街にいるホームレス調査で明らかになったこととして、30%が児童の保護施設の出身者であり、その者達の60%が一人親家庭であると指摘した。また、彼らは、薬物や被虐待のもとで育っていることが多い。タシソギ・センターを利用する20%がハンゲルを読めない。過去に結婚歴がある者が50%未満であり、18歳以前から生活のために仕事していた人が17%、14歳以下

から仕事（その仕事は、靴磨き、新聞販売が多く、女性は性売買が多い）をしていた人もいたとのことであった。さらに、多くは深刻な精神科疾患を患っているとの調査結果が出ている。

ヴィジョン・トレーニングセンター（精神疾患のあるホームレス支援施設）では、最近20代のホームレスが増えていることと、家族崩壊、教育を受ける事ができない、就職できない、日雇い、経済の不況から非行青少年が増え、結果としてホームレスが増加している等の事実が指摘された。

韓国の青少年の保護施設では、18歳（障害がある場合は20歳）以上になると、施設を退所しなければならない。その時に500万 won が渡されて退所となる。韓国では500万 won で住む場所は探せない。この為、500万 won を使い果たした若者達がホームレス化することがある。IMF危機以降、製造業での雇用がなくなり、高卒者が失業後、ホームレス化していることが多くなっている。保護施設を利用し、高校卒業した若者の就労先で多いのがコンビニ、ウエイトレス、宅配、ガソリンスタンド等である。このなかでも、ガソリンスタンドの仕事は、同年代で高級な車を運転して人と出会う機会が多く離職することが多いとタシソギ・センターの担当者は指摘する。

ホームレス支援を行う両センターでは、支援において自尊感の獲得を重視している。衣食住と医のすべてをホームレスに提供しても自活は出来ず、自尊感の回復があってこそ社会参加が可能であることを強調した。

ホームレス支援の場で行う人文学講座は、韓国では一般的に行われており、刑務所や貧困階層を対象とした様々なプログラムがある、このプログラムでは、どう生きるかを考える哲学と

の出会いが重視される。

タシソギ・センターの取り組みの一つにホームレス達が、ソウル市から委託を受けた放置自転車の回収(ソウル駅やヨンサン駅周辺)がある。その回収した自転車を改修し、使用可能としたものをフィリピンに空輸しプレゼントした。この実践を聞いたソウル市長は、自尊心の回復事業の重要性を認識し、予算の増額に取り組んだ。2009年1月の調査時に、センター長は、「ソウルで初めて飛行機にのり国際的なボランティア活動を行ったホームレス」達がここにいと話した。

#### 4-2 代案学校にみる自尊心獲得の重視

ソウル市にある代案学校 HAJA センター<sup>11)</sup>も、人文学を学ぶことを重視する。HAJAは、二つの実践哲学を持つ。一つは、HAJAは、その実践体を“仕事、遊び、自律の青少年文化作業場”と規定し、その実践体は“学校が身体に合わない10代たちが新しい時代の学校をつくりだす”ことにより成立すると考える。しかも、注入式教育と競争主義では、誰もが落伍者となり、HAJAは、自主的かつ主体的な協力学習を展開する場であると考え。二つ目に、HAJAは、その場を“友情と歓待の創意的自律空間”であるという哲学を持つ。ここでの学びを通して彼らは、“選択の道でよりよい判断をする—ともに見守る子どもたちがいる—”“不安だけど、寂しくなんかない”“お互いを励ましあい緊張しあう文化がある”と、集団が互いを疎外しない集団となり育ちあうことを保障する集団となることを追及している。

ホームレス支援の実践体や HAJA が求めるのは、まさに、競争主義と主体的に対峙し、人として生きる誇りの追求ではなからうか。我が国

では、この流れと異なる政策動向をみる。我が国の若者観を代表するものに、「若者の人間力を育てるための国民宣言」<sup>12)</sup>がある。この宣言は、「若者は、無限の可能性を秘めた、かけがえない存在です。我が国にとって人材こそ社会の礎であり、これからの日本を担う若者が、人間力をみがき、発揮することによって、明るい未来を創り出すことができます」と、若者の尊厳が尊重される社会づくりが必要であるかのような前文で始まる。しかし、その後の行動提起には、「子どもの頃から人生を考える力やコミュニケーション能力を身につけさせ、働くことの理解を深めさせるなど、社会に出る前の若者が生きる自信と力をつけることができるようにします」「社会にはばたく若者に広くチャンスを与え、仕事に挑戦し、活躍できるようにします」「若者が働きながら学ぶことのできる様々な仕組みを用意し、自らを高め続けることができるようにします」「働くことに不安や迷いを持つ若者が臆することなくやり直し、再挑戦できるようにします」と、今ある社会や企業への適応能力を獲得することが不安や迷いを克服し再挑戦できるかのような考えを示している。

今ある社会への適応が、若者の自尊心を獲得する手段となりえるのであろうか。韓国の場合、HAJA センターをはじめ、IMF 危機以降若者達の主体的な社会参加を保障することをめざす社会的企業に参加する若者たちは、学校が自身の生き方と合わないから、そのオルタナティブとしての HAJA での生活を選び集っている。

今、我が国の若者支援哲学に求められるものは、社会への適応方法や技術獲得技法ではなく、韓国のホームレス支援や若者支援で追及されている自尊心の獲得といった支援哲学ではなからうか。

### 4-3 韓国におけるひきこもり支援

2007年度以降の調査において、韓国におけるひきこもり（隠遁型ウェットリ）を始めとする危機青少年と称される若者達の公的サービスについて調査を行った。公的には、青少年センターや家出青少年を対象とした1388プログラム<sup>13)</sup>、さらにはシェルターなどのケアがあった。それは、総合的かつ包括的なプログラム（アウトリーチ、一時保護、医療支援、法律支援、学習支援等）になりつつあった。

韓国のネットワークは、

- (1)早期介入、予防のためのネットワーク（教育領域との連携）
  - 危機青少年支援
  - 学業中断予防ネットワーク
  - 代案プログラム
- (2)緊急対応ネットワーク（医療、司法領域との連携）
  - 医療的支援
  - 司法的支援
- (3)回復支援ネットワーク（地域の社会資源との連携）
  - 社会的支援：就業、進学支援プログラム（職業専門学校、雇用安定センターなど）
  - 心理的支援：個人相談、家庭訪問相談、家族治療、自助集団（자조집단）
  - 医学的支援：薬物治療、インターネット中毒治療など

として構成され、CYS（Community Youth Service net）を追求している。ソウル市青少年センターの職員は、国家政策が、精神的問題がある場合や犯罪青少年に力を入れるが、学校、職業等の問題を対象とした支援まで行わないように変化する傾向を示すなかで、危機青少年の

生活課題の解決を目指した支援や事業の展開を充実させる必要があると指摘していた。

#### 4-3-1 早期介入、予防希望を持つネットワーク（教育領域や民間との連携）

まず、危機青少年支援であるが、本人や家族あるいは市民から緊急救助の依頼電話（1388番）が入った時、青少年センターが1週間以内の危機介入を行う。緊急救助が終了した後、アウトリーチ担当者（ソウル市街のみでも約40人）が、木金土の午後7時から午前3時まで市内各地で危機青少年との接触を行う。ここでは、家出青少年を含めてなんらかの危機状態にある青少年を発見すると、家に帰るように勧奨する。それが不可能な場合はより安全な施設に保護する。

2009年に訪れたソウル青少年センター（ソウル市）は、1997年9月19日に開所された当時、危機青少年の支援センターであった。現在、青少年基本法第46条に基づきソウル市保健福祉家族府が民間に委託運営している。このセンターでは、240名の職員が働いていた。所長と部長がそれぞれ1名、5人のチーム長と15人のチーム員の他、アウトリーチ担当者やその他の職員であった。予算は、ソウル市からの補助費である。センターには、相談（個人相談、集団相談、心理検査、裁判相談等）、緊急援助、自活支援、教育、研究等の機能がある。こうした青少年センターは、ソウル市内に32か所、韓国全国に134か所あるとのことであった。

ここを利用する青少年の多くは、貧困家庭である。2008年からの不景気が影響し、子どもをシェルターに入れたいという電話相談が多くなっている。家出要因は、経済的貧困のみではなく、家族関係も大きい。個々の支援は、個別相

談が中心となる。青少年の相談来所やアウトリーチにより保護が生じた時、家庭に戻るかシェルターでの保護とするかの判断に迫られる。アセスメントは、青少年本人の願いと親の願いを根拠にして行う。親が子どもを強制的に家に連れ戻す場合があるが、家庭内暴力や性的暴力が疑われる場合は、1週間保護を行う。しかし、法的保護が必要となった青少年は、公的な効力を持つ児童保護センターにつなぐ。

ソウル市の青少年相談室は1989年に開設され、電話・面接・グループ相談を行っていたが、危機青少年に対応できないので、青少年支援センターを開設し、訪問相談も行うこととなった。一般的な青少年政策に危機青少年を対象とした政策が加わり、青少年センターにおいて危機青少年支援が実施され始めたのが、2007年からである。青少年センターが開設されて以後、相談員が家庭内や学校へ直接出向き調整支援を行うようになった。また、危機青少年とその家族には積極的介入し、6ヶ月以上の介入を図ることもある。

危機青少年支援を目的とする“1388プログラム”がある。これは、24時間年中無休の危機対応サービスである。電話での青少年の危機相談、情報提供及び保護者相談、緊急援助及び青少年機関との連携を行っている。昼間時間帯にはこのセンターが他のソウルの相談センターと連携した実践を行う。午後9時から翌朝9時まででは、このセンターで電話を受けている。このプログラムは、民間支援プログラムと表現されるものであり、民間の多くのボランティアに支えられ展開されている。例えば、市内のタクシー運転手には、青少年センターが月1回程度、危機青少年に関する教育を行い、その教育を受けたタクシー運転手が危機青少年を青少年セン

ターに移送する役割を担う。また、1388教師支援は、ソウル市内の教師103人がこのセンターで教育を受け、学校での支援を行う。さらに、ソウル市内では、医療支援も行っている。ソウル市内のメディカルセンターで危機青少年に対する支援を行う。1388グループのなかには、法律支援団や学習支援団もある。

ソウル市青少年センターが実施する不適応青少年支援事業のひとつに学業中断を目的とした“青い教室”がある。これは、非行青少年や学校の規律や規則に違反した青少年、あるいは衝動性が強く暴力傾向の強い青少年や自殺傾向のある人が対象となる。相談専門家が学校までアウトリーチし、学校内での集団相談や個別相談などのプログラムを実施している。2009年当時、ソウル市内の12校の中学校・高校と連携し事業を展開していた。

#### 4-3-2 緊急対応ネットワーク

危機青少年を対象とした危機介入は、まず、危機電話で受理しアウトリーチを行うか否かのアセスメントが開始される。アセスメント後、緊急保護や家族相談、医療支援、法律支援などの介入が決定される。青少年の危機問題を扱っている為、最低1日から7日までの期間内に適切な介入が展開される。

危機支援が終わった後でも、家に戻りたがっている青少年に対しては、Eメールをはじめとするなんらかのメッセージのやり取りを通して事後の介入や支援を行う。この事後の介入や支援が、回復支援ネットワークとして地域の社会資源と連携し実施されるのである。

アウトリーチ事業では、食べ物や医療を提供するのみではなく、家出青少年の相談を行い、進路を選択する資料となる心理検査を提供す

る。また、青少年だけではなく、保護者についての教育も行う。青少年センターには、一時保護所を設けている。この一時保護所は、“ウリッジ”（我が家）と命名されている。

その他に、ユースコンパニオン事業がある。この事業は、2006年より事業スタートし、ソウル市から年間1億 Won の人件費・運営費補助を受け実施されているものである。地域により取り組むプロジェクトが異なるが、多くの地域では、講演会の開催や青少年を対象としたキャンプ等に取り組んでいる。

#### 4-3-3 ソウル市東部児童治療センターにおける支援

1988年に行われたソウルオリンピックを契機にホームレス青少年が多くなり、保護機能のみではなく治療的機能を持つ施設が必要と考えられ、ソウル市東部児童治療センターが創設された。現在では、対象とする青少年の問題がホームレスからPCアディクションやギャンブル・アディクション、さらに隠遁型ウエットリやADHDなどと拡大している。なかでも、PCアディクション相談数が著しく増加している傾向は認められる。2020年に青少年の人口は少なくなるが、センターでの臨床的な傾向から、危機青少年問題は同じように起き、社会不適応や隠遁型ウエットリが増えることが予測されている。

このセンターには、二つの機能がある。一つは、相談治療機能である。この相談治療機能（相談治療センター）は、深刻な状態になる前の子どもや若者の支援を目的とする。ここでは、心理治療が中心に行われるが、精神科医はいない。心理検査（認知・IQ等）は、20万～40万 won の費用が必要であり、心理治療は、1回あたり5万 won の負担が必要とある。韓国

では、危機家庭に介入することが多く、低所得層から高所得層と幅広い心理治療が、公的な支援を活用し全く負担なく受けることができる場合から200万 won で受ける事が出来るものまで整備されている。

センターには、代案学校が併設されている。この代案学校は、心理治療を受けている間、一般の学校への登校が困難となる為に併設しているものであり、我が国の院内学級に近いものであった。

また、同センターは、虐待事例（韓国では、児童福祉法の対象が24歳までとなっている）へのアウトリーチも行っている。24時間365日、虐待緊急電話（129）を受け、夜間のアウトリーチもある。必要な場合には、警察や他機関と連携の下にアウトリーチが行われる。両親の治療も同時に行うケースがあり、最大2年間治療期間を設定する。緊急に介入した場合、一晚ソーシャルワーカーが当事者の家に留まることもある。緊急介入以外の事例では、様々な調整（話し合い・説得）を行った上で、強制的に立ち入る事もある。

#### まとめに変えて

本報告は、韓日ひきこもり調査の第一報である。現在、サンミョン大学の Insoo Lee 教授と共同で進めているひきこもり当事者の意味の世界を問う調査に関しては、第二報で報告することとする。それは、韓日の若者達の発達過程を社会的要因がどのように脅かしひきこもりを形成しているのかをケース・コントロール手法に基づき分析することとなる。彼らが生きている社会で、その活動する学校・家庭・社会における彼らの生活が、今ある社会のなかでなんらか

の歪みを持ちひきこもりが生じているのであり、その歪みを彼らの言葉から学ぶことによりひきこもりの社会的理解が可能となる。さらに、第二報では、地域実践主体の育ちとの関わりで、韓国の若者支援の場で、彼らの発達や社会的存在の価値を求めて実践を展開している386世代<sup>14)</sup>の実践哲学を詳細に分析する必要がある。彼らは、1960年代に生まれ、1980年代に大学で学び、1990年代で地域運動に参加し、2010年代の現在、地域運動の中核を担っている世代である。大学教員で地域運動に参加する者も多い。彼らの活動が、支援の場での人文学の重視をもたらしていると考えている。

本調査にあたっては、韓国の研究者や実践者に多くの協力を頂いた。共著者である Insoo Lee 教授 Ph.D. (Sangmyung University Graduate of Welfare Counseling Professor, Dept. of Family Counseling & Therapy) には、韓国における調査をコーディネート頂くのみならず、度々の来日による比較研究にも応じて頂いている。さらに、So Young Min 教授, Ph.D. (Kyonggi University Professor Department of Social Welfare) には、ホームレス支援調査にご協力頂いた。その他、ヒアリングを行った韓国の現場のソーシャルワーカーに心から感謝します。

## 註

- 1) 韓国における隠遁型ウェットリのクライテリアとして、①最小限の社会的な接触なしに3ヶ月以上部屋に泊まっている、②就学・就業などの社会参加活動を行うことができない、またはしない：お金が必要な場合1-2日アルバイトをしたりもする活動型隠遁型一人ぼっちを含む③友達は1名以下④部屋で生産的な活動をする

ことができない、またはしない⑤自分の隠遁状態に対して不安感や焦燥感がある⑥精神病的障害、または中等度以上の精神肢体障害がある場合を除くとなっている。日本のクライテリアとして、「様々な要因の結果として社会的参加(義務教育を含む就学、非常勤職を含む就労、家庭外での交遊など)を回避し、原則的には6ヵ月以上にわたって概ね家庭にとどまり続けている状態(他者と交わらない形での外出をしていてもよい)を指す現象概念である。なお、ひきこもりは原則として統合失調症の陽性あるいは陰性症状に基づくひきこもり状態とは一線を画した非精神病的な現象とするが、実際には確定診断がなされる前の統合失調症が含まれている可能性は低くないことに留意すべきである。」(厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「思春期のひきこもりをもたらし精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(H19-こころ一般-010)」(研究代表者 齊藤万比古)がある。

- 2) 1970年代以降、我が国の青年心理学や社会心理学の論壇では、青年期特有のモラトリアムについて語られてきた。なかでも、小此木啓吾は、現代社会における青年期特有のモラトリアムは、「古典的なモラトリアム心理」にと質的な異なりを持つことを“質”を決定的に変えたことを主張した。「新しいモラトリアム人間」像は、1980.1990年代と、より広範な若者に潜在的な形で、一般化していったと考えるのが妥当である。
- 3) ICF (International Classification of Functioning, Disability and Health: 国際生活機能分類) は、2001年に WHO (世界保健機関) で ICIDH (International Classification of Impairments, Disabilities and Handicaps: 国際障害分類) の改訂版として制定された。ICIDH が、「疾病」「機能障害」「能力障害」「社会的不利」と一方通行的な考え方を取るが、ICF は「心身機能・構造」「活動」「参加」「環境因子」「個人因子」それぞれが相互に影響し合っていると考える。
- 4) 斎藤は、ひきこもりをシステムとして捉える理由を、それがシステムとして安定したものと

なり、そのシステムには治療努力が入りづらいことを強調したいことと、不毛な原因論の左右され犯人探しが行われないためであったことを指摘している。この点においては、斎藤の論に異議はない。しかし、彼は、ひきこもりのメカニズムを理解するには、過去の原因を問わないシステム論が有用であると主張することに、彼らが歩んできた歴史のアセスメントの軽視があると考えるのである。

- 5) この分類は、国際シンポジウムにおいて行われた分類であり、ソウルの HAJA 企画部長カンウォンジュは、学校外青少年を、見守り関係形成と意地できる集団の有無によって「公教育不適応」と「社会不適応」に区分する。さらに、公教育不適応型を「代案教育探索型」「見守り優先型(未婚の子)」「生計優先型」「代案進路探索型」に分類し、社会不適応型を「放置型(ひきこもり、路上青少年)」「保護監視型(保護観察、少年院)」に分類する。彼は、そのなかで、ひきこもりの若者が抱える困難さを「両親からの小言、家族との不和、周囲の人たちの行き過ぎた関心、寂しさ、孤独感、無気力感、未来に対する不安、話を通じる同年代の友達や信じられる大人の不在、情報不在、生活管理の困難」と指摘する(カンウォンジュ, 2010, 韓国の青少年と青年が置かれている困難, 韓国調査研究時公表 ppt)
- 6) 我が国の青年の意識の変化を時系列でとらえるとともに、諸外国の青年の意識と比較することにより、我が国の青年の意識の特徴及び問題等を的確に把握し、青少年施策の検討の参考とすることを目的とするものであり、調査対象及び内標本数は、日本(1,090)、韓国(1,000)、アメリカ(1,011)、イギリス(1,012)、フランス(1,039)であり、調査対象者は、18歳から24歳までの青少年である。
- 調査方法は、調査員による質問紙を用いた個別面接調査(各国とも1,000サンプル回収を原則)となっている。
- 7) 湯浅誠は、幼少期と壮年期の間にある若年期は、家庭・学校と職場を接続する位置を持つ時期であり、肉体的、精神的、社会的スキル等の

形成過程にあるが故に不安定な時期であることを指摘している。湯浅は、若者達は不利益をこうむりやすい立場にあり、虐待からイジメを経由して職場のハラスメントへと負の連鎖を引き継ぐと言う。しかも、それは、幼少期の貧困から低学歴、劣悪・不安定な雇用環境への連鎖でもあると指摘する。2008年頃より「子どもの貧困」という言葉を使いながら追求されているのも、この負の連鎖がもたらす子どもの生存・発達の危機である。

- 8) ここでは、社会的回避現状を表す不適応青少年を“社会的、学業的に要求される参与活動や生産的な活動がほぼ無い状態”“友達がない、あるいは1名の場合”“未来に対する適切な目標が設定されていなく、目標を設定しようとする努力や目標を追求しようとする努力も表さない”“適切な関係形成や心理的支持体系が形成されていない”これらの様相によって現在あるいは未来に社会的、学業的、職業的適応に難しさを経験しているとか予想される青少年と定義している。
- 9) DSM-4 では、物質関連障害(Substance-Related Disorders)というカテゴリーがある。これは、人が物質を摂取することで起こりうるものであり、多用すると一種の中毒症状を起こすような多くの物質による障害を言う。インターネット・アディクションを、インターネットの利用が、自分の意志でやめることができない状況にあり、それが日常生活になんらかの支障をきたすようになっている、さらには、インターネットをしていないと不安感や焦燥感が生じるといった状況がある時、物質関連障害の診断基準を応用することは可能であると考えが、その背景になんらかの精神疾患がそんざいなのか否かが重要である。
- 10) 厚生労働省、2007年8月、住居喪失不安定労働者等の実態に関する調査報告書
- 11) HAJA スクールは、1999年12月18日にソウル市立ソウル市青少年職業体験センターとして設立された。運営は、延世大学に委託されている。年間予算は、約33億 won である(ソウル市補助金15億 won/ 労働部支援10億 won/ 自主事

- 業収入 8 億 won). 組織構造は運営部, 企画部からなり, スタッフ (30名) である。社会的企業であるノリダンや Organization 料理, トラベラーズマップ, リブランクがある。2010年10月にソウル市立青少年創意 (クリエイティブ) センターへ転換となった。
- 12) 2005年, 厚生労働省が「若者自立・挑戦プラン」策定後の若年者対策の充実を図る為に設けた「若者の人間力を高めるための国民会議」において, 2005年9月15日に国民会議宣言として明らかにされたものである。
- 13) 韓国青少年委員会が全国130所に青少年相談センターと青少年支援センターを設置した際に, 24時間相談活動を行う際に統一した緊急電話番号が1388である。この際に実施青少年危機介入プログラムに1388という緊急電話番号を付け呼ぶ。
- 14) 1990年代に30代で1980年代に大学生で学生運動に参加し1960年代の生まれの者のことを, 30代の3, 80年代の8, 60年生まれのをとり386世代という。現在40代の間が多い。韓国の民主化を進め, 今日の韓国を作り上げる中心となった世代であり, 若者支援の現場にも彼らの世代が多く働く。
- 文献**
- 趙惠貞, 1999, 第6回公開研究会 学校を拒否する子どもたち—韓国における子どもと若者の文化, 東京大学大学院教育学研究科付属学校臨床総合教育研究センター, 年報第1号, P33-36
- E・H・エリクソン, 1973, 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル, 誠信書房
- 황 순 길, 권 해 수, 장 미 경, 한국의, 2005, 은둔형 외톨이 등사회부적응 청소년 지원방안, p47-63
- 허 묘 연, 2005, 은둔형 외톨이 등사회부적응 청소년 지원방안, p65-95
- 金愛花, 2008, 大学入試制度の政治的側面に関する韓日中比較, 東京大学教育学研究科紀要第48巻, 115-123
- 金泰勲, 2008, 韓国の大学入試制度に関する考察, 国際基督教大学学報, I-A, 教育研究 50, 41-53,
- 宮本みちこ, 2008, 「失われた10年」と若者, 長岡大学文化講演会, [http://www.nagaokauniv.ac.jp/m-center/syogai/pdf/11\\_005-009.pdf](http://www.nagaokauniv.ac.jp/m-center/syogai/pdf/11_005-009.pdf)
- 岡本祐二, 2008, 若者労働の現在—「正社員」=「自立」モデルを超えて, 羽淵一代編, どこか〈問題化〉される若者たち, 63-92, 恒星社厚生閣
- Park Gil-sung, 2003, Culture and Social Life of N Generation in South Korea, 水野邦彦・萩原いずみ訳, 韓国N世代の文化と世代経験, 北海学園大学学園論集 117, 89-104
- 斎藤環, 2003, ひきこもり文化論, 紀伊国屋書店
- 佐藤久夫, 2002, ICF と今後の障害評価, 総合リハビリテーション, 第30巻11号983-986
- 佐藤久夫, 2003, ICDH から ICF へ, 精神医学, 第45巻11号, 1140-1147
- 山本耕平, 2005, 社会的ひきこもりの背景と類型化について, 大阪体育大学健康福祉学部紀要第2号, 23-37
- 山本耕平, 2009, 若者のひきこもりを精神保健福祉課題としてどう同定するか, 立命館産業社会論集第45巻 第1号, 15-33

Issues of Support Philosophy and Method to Assist Socially withdrawn  
Adolescents (HIKIKOMORI):  
Based on comparative researches between South Korea  
and Japan on youth problems  
The first report

YAMAMOTO Kohei \*, Insoo Lee \*\*, ANDO Kazuko \*\*\*

**Abstract:** This is the first report of comparative researches between South Korea and Japan on socially withdrawn adolescents (HIKIKOMORI). The research was conducted under research grants from the Association of Social Sciences, Ritsumeikan University, for three years since 2007. The subject of the title was “Comparative researches between South Korea and Japan on factors of social withdrawal — Social changes and factors of social withdrawal in and after 1970”. In 2007, the study was conducted by interviews with Korean researchers specializing in youth problems. The interviews were related to youth problems and Korean policies in that year. In 2008, the research was conducted in facilities supporting adolescents and homeless in Korea. In addition, interviews with young people and their supporters in Korea were conducted in 2009. As a result, HIKIKOMORI, “은둔형외톨이,” was found to be increasing in Korea, where its background was presumed to involve the escalation of the college entrance exam race and addiction to Internet, as well as the development of interpersonal virtual relationships. However, a lot of Korean young people not only accept the situation as a serious problem, but also unsurprisingly try to endure this. On the other hand, young people who think adaptation to the schools and companies is out of accord with their way of life are creating alternative places for working and learning after the IMF crisis. In such alternative places, the study of philosophy is employed as a program to enhance their self-esteem.

**Keywords:** HIKIKOMORI, South Korea-Japan comparison research, support philosophy, factors of social withdrawal

---

\* Professor, Faculty of Social Sciences, Ritsumeikan University

\*\* Professor, Dept. of Family Counseling & Therapy, Sangmyung University

\*\*\* Ph.D. Candidate, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University